



2019年漁期のヤリイカの漁況予測

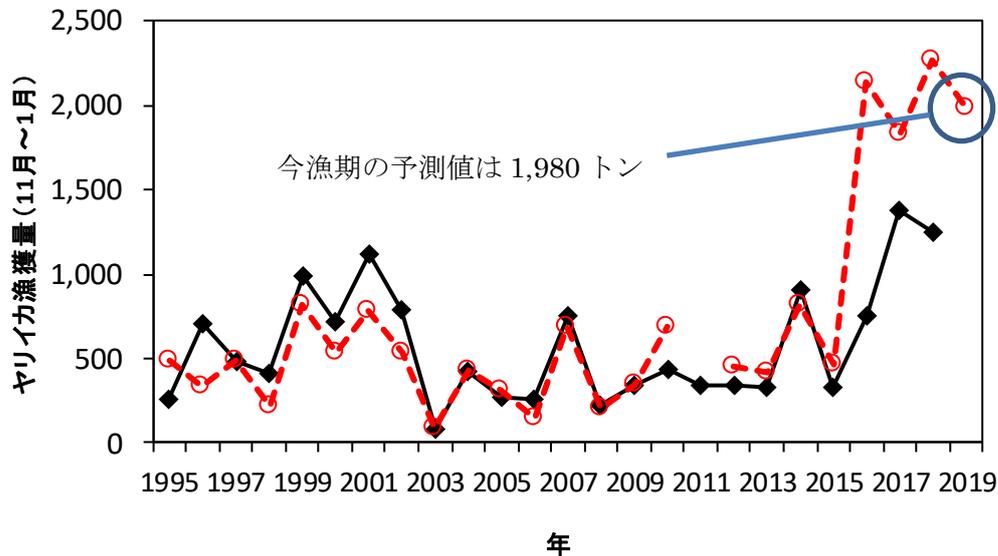
令和元年11月1日
宮城県水産技術総合センター
環境資源チーム

本県のヤリイカ盛漁期（11月～翌年1月）における漁獲量は、9月の仙台湾（38°23'N, 141°33'E）の底水温及び10月の底びき網漁船のヤリイカ CPUE（kg/隻）によって予測できることが知られている（増田 2015）。

そこで下記の式を使い、今漁期のヤリイカ漁獲量の見込みを推定した。

データセット：

$Y=87.49X_1+2.56X_2-1228.96$ ($n=19, r=0.829, \text{補正 } r^2=0.648, p=0.008 (X_1), p=0.005 (X_2)$)
Y；ヤリイカ盛漁期（11月～1月）の漁獲量（トン）



X_1 ；9月における仙台湾 St.12 の底層水温（℃）

X_2 ；10月の底びき網漁船のヤリイカ CPUE（kg/隻）

図1 1995年～2019年漁期におけるヤリイカ盛漁期の漁獲量（黒実線）と重回帰分析から得られた計算値（赤色点線）の関係。

その結果、昨年に引き続き仙台湾への加入条件が非常に良く、今漁期の11月～翌年1月の漁獲量は、1,980トンと推定されました。海況（親潮の南下：底水温が6.8℃以下になると産卵場に適さないためヤリイカは南下します）にも左右されますが、現時点では平年値（579トン）を大きく上回る漁獲が見込まれます。

※2016年～2018年の計算値と実際の漁獲量の乖離については、10月の漁獲物にケンサキイカが多数含まれていたことにより、計算値が過大に評価されてしまったことによるものと考えられます。

参考 1

親潮が南下し、沿岸に近づくとヤリイカは常磐以南へ移動します。また、底水温が 6.8℃ 以下になるとヤリイカは産卵適水温以下となりますので、漁場からいなくなります。

今年は親潮の南下は遅れ、宮城県沖の冷水塊は徐々に消失すると予測されることから、ヤリイカにとって水温条件は徐々に良くなると言えます。

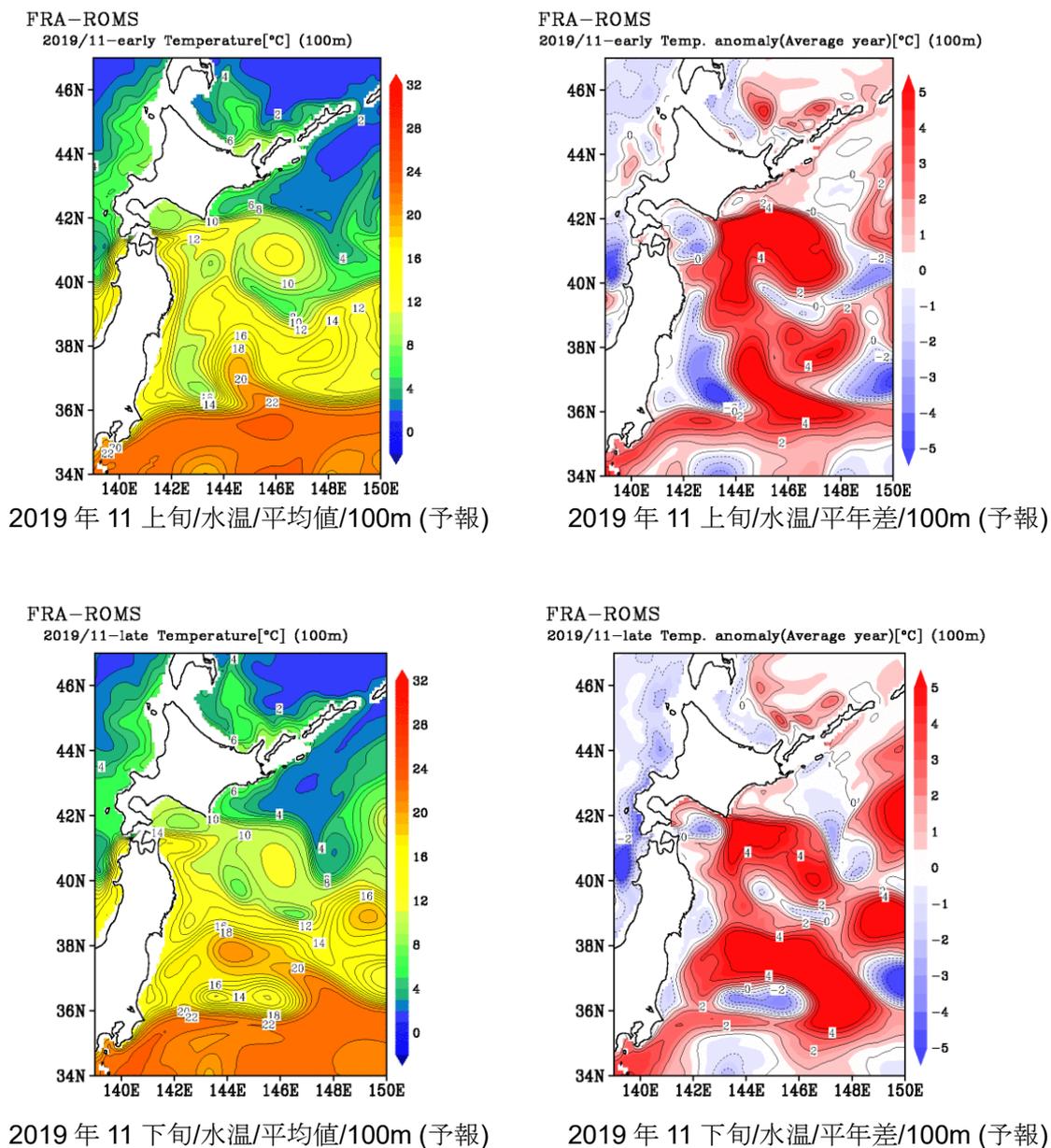


図2 FRA-ROMSによる11月上旬及び11月下旬の水深100mの水温予測

参考2

今年10月に週1回の頻度で沖底船に協力いただいてケンサキイカとヤリイカの混入率調査を行った結果、比率は0：100でした。去年は10月もケンサキイカがかなり混入していましたが、今年は10月以降ケンサキイカが見られなくなりました。

表1. 2019年10月のヤリイカとケンサキイカの混入割合

	ヤリイカ (%)	ケンサキイカ (%)	数量	備考
10月1日	100	0	8.9kg	種類分け、精密測定
10月1日	100	0	8.0kg	種類分け、精密測定
10月10日	100	0	8.2kg	種類分け
10月15日	100	0	10.6kg	種類分け
10月24日	100	0	9.7kg	種類分け
10月28日	100	0	12.0kg	種類分け、精密測定

計 100 0



10月28日(月) ヤリイカサンプルの写真

大きくて(外套長24cm)胴体も太く、触腕も長い(鰭付近まであった)ので一見ケンサキイカと見間違えるが、胴体先端が尖っている、触腕がケンサキイカに比べてやや細い、解剖しても墨袋に発光器がなく、ヤリイカと断定。